真言宗一寺院の年中行事

増田 大将
（渡部 圭一ゼミ）

目　次

はじめに
第１章　研究の目的と方法
　第１節　寺院行事研究の視点
　第２節　調査の方法
第２章　調査寺院の概要
第３章　年中行事の調査
　第１節　大晦日・新春護摩、お正月
　第２節　節分
　第３節　愛宕の火祭り
　第４節　お盆
　第５節　彼岸
　第６節　金比羅社の例祭
　第７節　小括
第４章　考察
おわりに

はじめに

2002 年 10 月 21 日、私は京都府舞鶴市天台にて増田家の長男として生を受けた。その後、3 年間を天台で過ごし、2005 年 4 月より舞鶴市泉源寺地区にある智性院という寺院での生活が始まった。私の父は僧侶として智性院を支え、多忙な日々を送る一方、母はその傍らで家庭を守りながら父の活動を支える姿を見せてくれていた。幼い頃の私にとって、そうした両親の姿は日常そのものであり、自然と寺での生活が自分の中に根付いていった。

智性院では年間を通じてさまざまな行事が執り行われている。行事の際には檀家や地域住民が多く集まり、賑やかな雰囲気の中で人々との交流が生まれた。子どもの頃の私は、そんな行事の場で檀家や泉源寺地域の方々に温かく見守られ、時には可愛がられながら成長してきた。そうした体験は、私にとって智性院の行事が単なる宗教的な儀式以上の意味を持つ存在として意識されるきっかけとなった。

私が智性院の行事に初めて主体的に関わるようになったのは、小学校に入ったばかりの頃である。愛宕の火祭りにおいて、初めて太鼓を叩く役を任されたことを今でもよく覚えている。それ以降、大晦日や新春護摩の行事に立ち会い、節分の豆まきでは檀家の方々の前で役を務めるなど、次第にさまざまな行事に参加するようになっていった。当時は、それが特別な経験だと感じることはなかったが、今振り返ると幼いながらも寺の行事に対する関心が芽生え始めていたように思う。

卒業研究のテーマとして智性院の年間行事を取り上げるにあたり、自分がこれまで生活の一部として経験してきた行事について改めて調査を行うことにした。その結果、私自身がこれまで見聞きしてきた行事と、父をはじめとする先代が行ってきた行事との間には、予想以上に大きな変化や相違があることが分かった。また、その背景には地域社会や寺の役割の変遷が大きく影響していることを知り、改めて行事の持つ意味や価値について深く考える機会を得た。

本論文では、智性院における年間行事の変化やその背景にある要因について、私自身の体験もまじえつつ、2023 ～ 2024 年に実施した現地調査をもとに記述と考察を進めていく。とくに、地域住民との関わりや檀家の方々の役割に着目しながら、智性院がこれまで担ってきた役割とその意義について述べていきたい。

第１章　研究の目的と方法

第１節　寺院行事研究の視点

仏教行事が民俗信仰や地域社会とどのように関わりながら発展してきたかを考察する上で、いわゆる村落寺院に関する先行研究をみなおすことは

不可欠である。とはいえ筆者が検討したかぎりでは、個々の小規模寺院の年間の行事をフィールドワークによって詳細に把握し、かつ地域社会との関わりの変化を扱った論考を見出すことができなかった。そこで本論文では、やや間接的ではあるが、『仏教民俗学大系』第６巻・第７巻に収録されている仏教行事に関する総説論文を読み直し、そこから得られる示唆や課題を抽出することにしたい。

まず伊藤唯真の「四季の仏教行事と民俗信仰」[1]では、仏教行事が民俗信仰と結びつく過程が解説されている。修正会や修二会、彼岸会、盂蘭盆会などは、仏教的要素と民俗的基盤が融合し、時代と共に変容しながら民間に定着したとされる。修正会・修二会は、日本古来の正月行事に仏教の悔過法が取り入れられたもので、豊作祈願や祖先感謝を中心とする農耕儀礼的性格を有している。彼岸会は浄土教的思想と太陽信仰が交錯し、日本独自の年中行事として発展したという。これらの行事は、寺院内にとどまらず、地域共同体や家庭にも広がり、仏教と民俗の関係性を表している。

同じ著者による「寺院行事のなかの民俗」[2]では、寺院の年間行事において民俗信仰が色濃く反映された例が取り上げられている。修正会・修二会のような年頭行事では、攘災招福や罪穢の懺悔が行事の中心となり、これらは農事祈願や祖霊祭とも関連する。牛玉宝印や鏡餅といった護符・供物が、災害除けや豊作祈願として用いられる。また追儺や鬼踊りなどの悪霊払いの行事では、鬼が神聖視される場合もあり、民俗的な儀礼と仏教行事の交錯が認められるという。このように、寺院行事は仏教的儀礼であると同時に、地域の民俗信仰や生活文化を反映したものとなっている。

一方で、上記の二編の総説では、個々の地域性にまで論及されているわけではない。個々の寺院の立地する歴史的・文化的背景が行事にどのように反映されているかはもちろん、寺院特有の行事の特徴や独自性についても調査が必要である。また寺院行事の意義を知る上では、住職や地域住民（檀家など）といった人々の視点を通じ、地域にとっての行事の役割を掘り下げて調べる必要があると考えられる。

つぎに戸川安章の「寺と地域社会」[3]では、大正時代の農村における寺院は宗教的役割にとどまらず、地域社会の集会場や文化的中心地として機能していたことが述べられている。年間行事や説教の場だけでなく、興行師の興業や兵士の宿営所としても利用され、これが寺の維持にも寄与していた。檀家は寺院を支えつつ、幼少期から寺と関わって信仰心を育み、同時に地域社会での絆を深めていた。戦後、都市化や生活の変化により村と寺院との関係が希薄化する以前には、寺院は宗教的、文化的、そして社会的な役割を担う存在であった。

おなじ論集に収録される田中宣一「寺院と農耕儀礼」[4]では、豊作祈願や災害回避のための農耕儀礼について解説されている。寺院は、修二会や盂蘭盆会など仏教行事を通じて農耕儀礼と結びつき、また雨乞いや虫送りなどの地域行事にも関与した。事例として、長野県高峰寺が挙げられ、祈祷や初穂集めを通じて地域社会に貢献していたことが示されている。寺院は地域文化の中核として農耕儀礼を支え、仏教と民俗信仰の融合を促進していたことがわかる。

上述の二編の総説では、農耕儀礼や民俗信仰と寺院の関係が論じられているが、地域差や宗派の差は捨象され、やや一般的な議論にかたよっているともいえる。また、具体的な年間行事の内容や手順、寺院住民との関係などが具体的に示されているわけではない。とくに都市化や近代化の中での年間行事の変容について住職や地域住民の視点による考察が不足している点にも制約がある。

これに対して本論文では、京都府舞鶴市泉源寺地区をフィールドとして、個々の寺院の行事の内容とその変容を掘り下げて記述することで、寺院の個性をふまえた民俗誌を提示することを目的とする。この際、一村落寺院を対象として、聞き取りだけでなく行事の参与観察を行うことで、寺院と地域との関わりを多角的に明らかにすることを課題としたい。

第２節　調査の方法

本研究では、後述する智性院における寺院行事の記録とその意義の理解を目的として、聞き取り調査と参与観察、および文献調査の手法を組み合わせて調査を行った。2023 年 7 月 23 日、8 月 13 ～ 16 日、12 月 31 日、2024 年 1 月 1 ～ 6 日、2 月 1 ～ 4 日、7 月 19 ～ 21 日、8 月 4 ～ 17 日の間に

現地に滞在し、この間に実施された行事に参加し、準備から終了までの過程を時系列的に観察・記録した。この際には写真撮影と映像記録を併用した。また、行事の目的やその背景をより深く理解するため、上述の期間には随時、住職と住職夫人に聞き取り調査を行い、行事の移り変わりについての知見を得ることに努めた。

第２章　調査寺院の概要

まず本論文が対象とする寺院の歴史的背景、寺院としての概要、地域社会との関係について概要を述べておく[5]。智性院が位置する地域の歴史的な成り立ちや、かつて存在した泉源寺との関係、そして同地区における他宗派の寺院との役割分担についても触れる。また智性院の現状についても、登録されている檀家や地域住民との関係、祈祷活動をはじめとする寺院の具体的な役割について記述する。あわせて住職の系譜をたどり、智性院の歴史的な歩みを明らかにする。

寺院の立地　智性院は、京都府舞鶴市泉源寺地区に所在する真言宗寺院である（図１・写真１）。智性院は愛宕山と金比羅山の麓に位置し、周囲には樹木が生い茂る自然環境が広がっている。寺の庭には地蔵が祀られている。また智性院の西にある愛宕山の頂上には愛宕神社が鎮座しており、火伏せの神として信仰されている。

寺院の歴史　かつての泉源寺地区には、鎌倉時代に創建されたとされる泉源寺を中心に複数の塔頭寺院が存在していた（ただし現在、泉源寺は地区名で、この名称の寺院は現存していない）。そのひとつが真言宗の智性院である。智性院は享保３年（1718）に開基され、その時点から葬祭寺院としての活動を行っていたと考えられる。

一方、祈祷に関しても、近世を通して行われていたことが推測されるが、早い時期の祈祷の具体的な内容については不明である。資料的に明らかな範囲では、明和６年（1770）４月、疫病が流行した際に智性院が祈祷を行い、その結果として村から感謝の意を込めて五部秘経が寄進されたという記録が残されている（写真２）。地区の住民の信仰生活を支える寺院の姿をここにみることができる。その名残は現在の祈祷活動にも反映されており、現代では、子供の誕生や厄年、災厄回避、庭木の伐採、家の地鎮祭、新築家屋の家相占い、井戸や池の埋め立てなど、地域住民の生活に密接に関わる祈祷が行われている。

檀家の構成　智性院には現在、登録されている檀家が25軒（舞鶴市泉源寺地区に７軒、舞鶴市愛宕地区に18軒）存在する。また、地域には檀家に登録していない信徒も多く、正確な数は不明であるが、約80軒ほどであるという。檀家総代はＭ氏（60歳男性）が務めており、護持会役員や世話役、世話人として寺院運営に深く関与している。具体的には、住職と話し合う場を設けるほか、寺院の会計（墓地使用料会計、管理料会計、一般会計）を管理するなど、多岐にわたる役割を担っている。

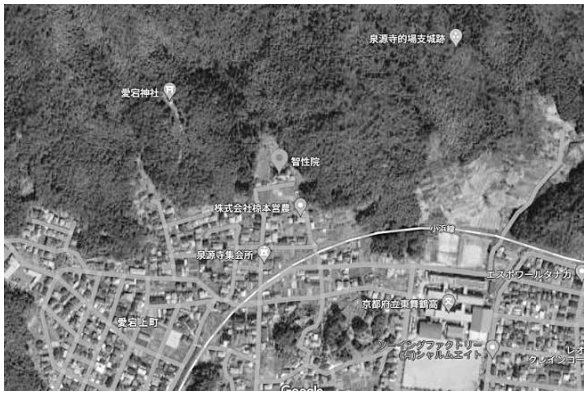

図１　智性院の所在地
（Google map をもとに一部改変）

写真１　智性院の全景
（2022年４月８日、増田憲嶺氏撮影）

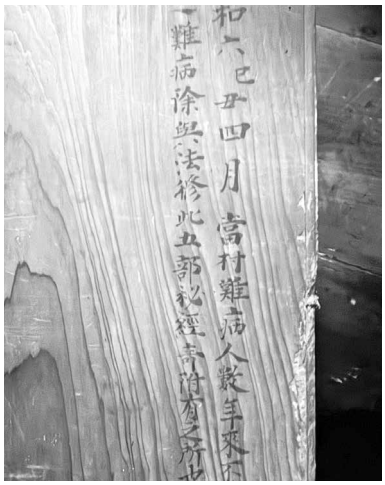

写真２　五部秘経が寄進された記録
（2024 年 7 月 20 日、増田憲嶺氏撮影）

一方、泉源寺地区に存在するもう一つの寺院である臨済宗の龍興院は、室町時代の天文 24 年（1555）以降に創建されたと伝えられている。龍興院は、葬儀を中心として活動しており、檀家の規模も大きく、現在では泉源寺地区の内外に約 300 軒の檀家を抱えているという。このように泉源寺地区では、智性院は祈祷、龍興院は葬儀という役割分担が、現在でも地域に根付いているといえる。

葬祭寺院としての活動　智性院の檀家の間で執り行われている葬儀の流れはおおむね以下のとおりである。まず納棺前に枕経を行う。この際、住職は故人の人となりについて遺族から話を聞き取る。その内容には性格や仕事、趣味などが含まれる。枕経の際には住職は改良服を着用する。次に、故人の戒名を考案する。戒名は故人の生前の人柄や信仰に基づいて決定される。また、位牌として本位牌と野位牌の 2 種類を準備する。また塔婆も用意する。3 尺（約 90cm）のものを 7 本、初七日から七七日（49 日）までの期間分として準備する。さらに葬儀当日と百箇日に使用するための 4 尺（約 120cm）の塔婆も 2 本用意する。諷誦文は奉書紙に記しておくが、これは枕経の場で聞き取った故人の性格や仕事、趣味などを盛り込んだ内容とする。

通夜は葬儀前日の夜に行われ、読経を中心に進められる。この際には、住職は黒衣や如法衣を着用する。葬儀当日は引導作法および読経が行われ、色衣や如法衣を着用する。その後、出棺を経て斎場へ移動し、斎場で再び読経が行われる。この場面では改良服を着用する。骨上げおよび初七日は、最近では葬儀当日に行われることが多くなっており、この際も改良服を用いる。

逮夜は初七日から七七日までの期間に行われ、読経や御詠歌を行う。また、回忌法要として 1 周忌（翌年）、3 回忌（翌々年）、7 回忌（6 年目）、13 回忌（12 年目）、17 回忌（16 年目）、23 回忌（22 年目）、25 回忌（24 年目）、27 回忌（26 年目）、33 回忌（32 年目）、50 回忌（49 年目）、100 回忌（99 年目）と、節目ごとに読経や御詠歌を行う。

寺院付属の墓地　智性院の墓地は寺の裏手、北側に広がっている整備された霊園（智性院霊園）と、智性院の東側にある金比羅山の麓にあるヤマボチ（山墓地）との 2 か所が存在する。また、永代供養を目的とした「観音廟」が、智性院霊園の最も奥の場所に位置している。東側の山墓地には先代住職の墓のほか 5 基の墓が存在する。一方、智性院霊園にはおよそ 160 基の墓があり、さらに東側（山墓地の近く）に新たに増設された第二の智性院霊園（山墓地とは異なる）には 25 基の墓がある。これらの霊園は宗旨宗派を問わず、営業はそれぞれの石材店に委任している。

住職家のあゆみ　つぎに住職家について判明するかぎりで述べておく。現住職の増田憲嶺氏の祖父の代にあたる松本留吉氏（法名・性空）は、明治 24 年（1891）2 月 7 日、滋賀県犬上郡青波村古沢に士族松本寅次郎の八男として生まれた人物である。彼は明治 41 年（1908）、17 歳で舞鶴海兵団に入団し、その後、大正 7 年（1918）に現役を満期し、一等兵曹として海軍を退役。同年、舞鶴海軍工廠に勤務を始めた。仏門に入るきっかけや動機は明確ではないが、大正 14 年（1925）2 月 4 日、34 歳のとき、舞鶴市北吸の鏡智院（現大聖寺）に入門し、翌年得度を受けた。その後、「性空」として法名を得、昭和 4 年（1929）から昭和 6 年（1931）にかけて、松尾寺で僧侶になるための修行を行っている。昭和 5 年（1930）の春、和田の長江寺に入寺したが、翌年、当時の智性院住職が遷化したことを受け、昭和 6 年（1931）9 月、智性院の住

職となった。このとき性空は40歳であった。

その翌年の昭和7年（1932）3月、増田憲嶺氏の父である増田憲空氏が生まれる。昭和44年（1969）1月に増田性空氏が亡くなり、増田憲空氏の兄である藤田聖空氏が一時的に住職を務めた。その後、増田憲空氏は海上保安庁を定年退職し、55歳で高野山にて修行を開始。昭和63年（1988）頃に正式に智性院の住職となり、平成17年（2005）までその職を務めた。令和6年（2024）11月に逝去。

一方、増田憲嶺氏は昭和37年（1962）10月に生まれた。高校卒業後、京都で調理人として働いたのち、平成7年（1995）に高野山で修行を行った。平成17年（2005）に増田憲空氏の後を継ぎ、智性院の住職に就任し、現在もその職を務めている。

第３章　年中行事の調査

本章では、智性院で行われている年中行事について、調査内容をもとに詳細に記述する。比較的規模が大きい行事を中心として、それぞれの儀式の意義や具体的な手順、またそれにともなう準備作業や地域との関わりについて記述する。あわせて行事が行われる過程を時系列で整理する。とくに智性院独自の特徴や歴史的背景を踏まえながら、これらの行事が地域住民や檀家にとってどのような役割を果たしているのかを描き出す。

なお各行事の記述にあたっては、まず聞き取りの内容[6]を掲げ、つぎに実見した行事の時系列的な記録を配した。ただし調査日程の都合上、参与観察ができなかった彼岸と金毘羅さんの行事については聞き取りのみとした。

第１節　大晦日・新春護摩、お正月

智性院では毎年12月31日から1月1日にかけて、新春護摩が執り行われる。この護摩は、御札をご祈祷するための儀式であり、祈祷された御札は翌年のお盆期間中に棚経で訪れた家々に配布される。

時期的に寒さが厳しい上に、寺院自体が山の麓に立地していることもあり、高齢者にとって参加するだけでも大きな負担となっている。このため、実際には2時間かかる内容の儀式も、1時間以内で済むようにと増田憲嶺氏が自ら作法を短縮し、工夫を凝らして行を執り行っている。

なお聞き取りによると、舞鶴市に所在する真言宗寺院の中で、大晦日から元日にかけて護摩を焚く習わしがあるのは智性院のみである。

2023年12月29日～2024年1月4日の記録

12月29日

13時30分　庚申堂や仏壇、本堂、床の間に鏡餅を供える。庚申堂、仏壇、本堂には、購入した鏡餅（小さめサイズの二段の餅にプラスチック製の橙がのっているもの）を供える。床の間の鏡餅は、大きいサイズでプラスチック製の二段の鏡餅を重ねたもので、その上に本物の橙、しめ縄や稲穂、紅白の紙、串柿や扇などの縁起物を飾りつける（写真3）。その右側には松や南天を用いた生け花を配置し、その後ろの壁には七福神が描かれた掛け軸を掛ける。

12月30日

10時00分　増田憲嶺氏が門（智性院の入り口にある）に智性院の家紋が書かれた門幕を取り付ける（写真4）。

10時20分　門の周り、寺門前に「初詣」の文字が書かれた旗2本と、門横にある京極マリア像の後ろに「南無不動明王」と「祈祷御守護」の文字が書かれた旗を取り付ける。

11時10分　旗取り付け作業が終わる。

12月31日

23時45分　増田憲嶺氏が新春護摩を始める。本尊に頭を下げる。

23時46分　印を組み、水と油を木の棒で釜に注ぎ、鐘を鳴らし、結界の中を清浄にする儀式を行う。

23時50分　釜の上に井桁を組む。縦に2本、横に2本組「井」の形にした上にさらに縦に6本組む。

23時52分　ロウソクから松の根に点火し、その松の根で釜に点火する。

23時53分　護摩木を追加し火が強まる。

23時58分　願いごとが書かれた護摩木をひたすら投げ入れていく。

1月1日

00時10分　火が弱まったところで樒を入れる。
00時12分　お守りや御札を火の上で3度回す所作をしながら祈祷する。
00時14分　不動明王の真言をお唱えする。
00時22分　新春護摩が終わる。

1月4日

07時00分　新春護摩で御祈禱した御札を檀家や泉源寺地区の住民（智性院の檀家ではないが昔から泉源寺に住んでいる人、現在は泉源寺地区に住んでいないが昔泉源寺地区に住んでいた人）に配る。それぞれの家のポストに投函する。
08時30分　御札配りが終わる。

第2節　節分

護摩には種類があり[7]、智性院で行われる護摩は星護摩というものである。高野山での修行では不動護摩の作法は習うが星護摩については教えられない。星護摩は、本尊が一字金輪仏頂尊で息災・増益・敬愛法を扱う護摩である。本来節分に行う護摩は星護摩が正しい。増田憲嶺氏は、修行を終えた後の2000年頃に、奈良県橿原市久米町にある久米寺まで足を運び、星護摩の伝授会に参加し学んだ。増田憲空氏は不動護摩を行っていた。不動護摩は、不動明王が本尊であり、息災法のみである。

護摩の行にあたっては、護摩壇の周囲にお供え物を配置する。まず、護摩壇の周囲には銀銭10文を模したもの、木の棒、紙、御札を配置する（写真5･6）。この紙は、本尊が降臨する依り代とされ、仏が降臨した様子を観想しながら行が進められる。

また、供物として五穀（米、麦、粟、小豆、大豆）を混ぜて押し固めたものにご飯をまぶし、これを護摩壇に供える。さらに、散杖（さんじょう）や洒水（しゃすい）を護摩壇の近くに配置し、汁米菓も供える。

井桁を組むための段木は、護摩を行う増田憲嶺

写真3　床の間の正月飾り
（2010年12月30日、住職夫人撮影）

写真4　門幕
（2010年12月30日、住職夫人撮影）

写真5　節分の護摩壇
（2024年2月3日、筆者撮影）

写真6　護摩木と樒の葉
（2024年2月3日、筆者撮影）

氏の座る右側に樒とともに準備され、その総数は165本にのぼる。太さごとに分類されており、太いものが36本、中くらいのものが21本、細いものが108本となっている。

さらに、檀家へ配布するための御札と節分の豆は、護摩壇の結界の外側奥に配置される。かつて2013年頃までは、節分の日に70人ほどの檀家や泉源寺地区の住民が集まり、子供たちが豆まきを行う光景が見られた。しかし、近年では泉源寺地区の子供の減少や参加者の激減により、豆まきは行われなくなり、代わりに祈祷された豆が檀家に配布される形となっている。

また、節分の時期は寒さが厳しく、寺院が山の上に位置しているため、高齢者にとって参加するだけでも大きな負担となっている。このため、実際には長時間を要する護摩祈祷も、増田憲嶺氏が作法を工夫し、1時間以内で済むよう短縮して行われている[8]。

2024年2月2日～2月3日の記録

2月2日

14時30分　護摩を焚くための本堂の準備を行う。上述のように道具や供物を用意する。

2月3日

13時44分　檀家が本堂に参集を始める。
13時55分　今回参加する全ての檀家が集まる。総勢15名で、男性が6名、女性が9名ほどで、世代は60代から80代である。
14時00分　増田憲嶺氏が節分星護摩を始める。
14時02分　増田憲嶺氏が本尊と檀家に頭を下げる。
14時03分　印を結び星の真言を唱える。
14時04分　合掌礼拝。
14時05分　結界の中を清浄にする儀式を行う。水と油を木の棒で釜に注ぐ。
14時07分　星の真言を唱えながら印を結ぶ。
14時09分　再び油を木の棒で釜に注ぐ。
14時11分　護摩を焚くための井桁を組む。井桁の形状は木材を交互に直角に積み重ねていく構造である。具体的には、まず2本の木材を釜の上に縦に2本置き、その上に別の2本の木材を直角方向に平行に置く。その上に7本の木の棒を縦に置く。ロウソクから松の根に点火し、その松の根で釜に点火する。
14時17分　樒を入れる。
14時18分　繰り返し段木と願いごとが書かれた護摩木を入れ、火を強めていく（写真7）。
14時38分　火が弱まり、檀家に配る御札と豆を火の上で3度回す所作をして祈祷する。
14時42分　火が消え星の真言をお唱えする。
14時45分　節分星護摩が終わる。

写真7　節分の星護摩の様子
（2024年2月3日、筆者撮影）

第3節　愛宕の火祭り

経ヶ峰山上に位置する愛宕神社のお堂は、神仏習合の特徴を示しており、白馬にまたがり甲冑を身にまとったお地蔵様が祀られている（写真8）。さらに、太郎坊・次郎坊という2体の天狗も共に祀られている。愛宕神社では例年、例祭の日の昼間に山上への道作りが行われ、夜に例祭が執り行われる。

2019年までは、愛宕の火祭りは4名の僧侶によって行われていた。参加していたのは、住職である増田憲嶺氏、その父である増田憲空氏、舞鶴市北吸にある大聖寺の住職であるM氏、そして舞鶴市鹿原にある金剛院の住職であるM氏である。ところが新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、他寺から僧侶を招くことを控え、以降は町内の

人々のみで火祭りを行うようになった。これ以降、儀礼に参加する2名の檀家の男性は天狗の面を着用するようになった。

かつては檀家や泉源寺地区の子供が太鼓を叩いたり、檀家の女性陣が素麺接待のための素麺作りを手伝ったりする姿が見られた。しかし、過疎化と高齢化の影響で、現在ではそのような光景は失われている。上述した天狗の面については、とくに深い意味はなく、檀家総代であるM氏が「僧侶ではない人が結界の中に入るのはよくない」と考えたため、ネットショッピングで天狗の面を購入し、使用することになったものである。

愛宕の火祭りで行う柴燈護摩の技法についても、節分の星護摩同様に高野山の修行では教えられない。そのため増田憲嶺氏は、高野山の修行を終えた後の1995年頃に、父の増田憲空氏とともに、岡山県岡山市中区国富にある法輪寺で行われた伝授会に参加し、その技法を学んだ。

火祭りの過程で行なわれる「法弓の儀」は、五方を守護する明王への祈りとして行われる儀式である。この儀では、東西南北および中央を守護する明王の加護を祈りそれぞれ矢を放つ。最後に鬼門とされる北東の方角に向かって矢を放ち、しめ縄で囲われた結界を神聖な場にする意味をもつとされる。矢を射る儀式の後、その矢は持ち帰って家に祀られる。そのことで、一年を通じて除災招福、無病息災のご利益が得られると信じられている。この「法弓の儀」は、数年前まで増田憲空氏が執り行っていた。

次に行われる「法剣の儀」は、護摩壇の前で法剣を振るう儀式である。法剣を振る際には、空中に「光」という文字を描くように剣を振り下ろし、これによって煩悩や迷いを断ち切るとされている。この儀式は、心の闇に光を照らし、人間が本来持っているはずの「仏の心」を呼び覚ますものである。かつては金剛院のM氏がこの儀式を担当していた。

写真8　愛宕神社のお堂の内部
（2023年7月21日、筆者撮影）

さらに、中国の陰陽五行説に基づき、祭りの儀式が構成されている。東方を象徴する「木」を、西方を象徴する「金」で切り、中央の「土」の上に丸太を井桁に組み護摩壇を設置する。この護摩壇は檜の葉で飾られており、人々の煩悩と妄念の象徴として南方の「火」が用いられ、護摩壇を焼き尽くす。参拝者の名前とお願いごとが書かれた護摩木は護摩壇に投げ入れられ、この護摩木は火中で燃やされ、煙とともに天に昇り、願いごとが成就するよう祈念される。そして最後に、北方を象徴する「水」を注ぎ、火を鎮めることで所願成就を祈念する。

2023年7月19日～7月21日の記録

7月19日

08時00分　東舞鶴高校のテニスコートより上の山に、住職の増田憲嶺氏と檀家総代であるM氏（前述）、檀家役員であるM氏（70代男性）の3人で護摩壇に使用する檜葉を取りに行く。増田憲嶺氏とM氏の軽トラック2台で現地へ行き、植木バサミやノコギリを使用して作業する。服装は山の中であるため3人とも作業着を着ており、取った葉は軽トラックの荷台に乗せて運ぶ。

10時00分　檜葉取りが終わる。取った葉は、智性院の霊園駐車場に置いた。

13時00分　護摩壇の組み立て。作業は増田憲嶺氏1人で行った。霊園駐車場の中央に井桁を組む。井桁の木は杉の木で、1本の直径は約12cm、長さは約80cmである。井桁の形に組む際は5段の高さになるようにして、その外側に檜葉を取り付ける。14時頃から15時頃まで雨が降り作業を中断。

15時00分　護摩壇組み立ての作業再開。檜葉の中まで水が入ってしまったため、1度檜葉を取り除き、新聞紙などの燃えるものを中に入れもう一度檜葉を取りつける。

17時00分　ブルーシートを被せて作業が終わる。

7月20日

09時00分　増田憲嶺氏が結界に使用する竹を寺の裏手の山に取りに行く。

09時20分　石と竹、しめ縄で護摩壇を囲う結界を作る。中央に護摩壇が配置され、これを囲むように四方に立てられた四本の竹がしめ縄で結び結界を形成する。

10時00分　結界の作成の作業が終わる（写真9）。

7月21日

15時10分　結界のしめ縄に紙垂を取りつける。しめ縄にはジグザグに折られた四色の紙垂を等間隔に垂れ下がるように取り付ける。紙垂は、北は青、西は白、南は赤、東は緑である。護摩壇にも黄色の紙垂を等間隔で取り付ける。

16時50分　儀式で天狗役を担うM氏とM氏が参集。

17時00分　観覧者のための椅子を出す。

17時30分　不動明王像と花を用意する。祭壇には、不動明王像と花、香炉とロウソク、檀家や泉源寺地区の住民（智性院の檀家ではないが昔から泉源寺に住んでいる人）に案内を送り、依頼された願いごとと名前を書き入れた護摩木、弓と矢、刀が配置されている。

17時35分　檀家（役員ではない）や観覧者（智性院の檀家ではないが泉源地区に住んでいる人々）が集まり始める。参集されたのは30名ほど。ほとんどが50代以上で、男性と女性は半々、その中で50代の比較的若い男性が2名ほどおられた。

18時08分　愛宕の火祭りが始まる。本堂にある本尊に向かって増田憲嶺氏と天狗役のM氏とM氏が般若心経を唱える（写真10）。

18時10分　合掌礼拝。

18時11分　司会の住職夫人による祭りの由来とこれから行う法弓の儀、法剣の儀の所作の説明とともに祭りが進行していく。

18時13分　法弓の儀を行う。法弓の儀は、前述のとおり、東西南北と中央を守護する明王と、北東の方位にある鬼門に矢を放ち、しめ縄で囲われた結界の中を神聖な場にする儀である。修法は愛宕山の天狗太郎坊役のM氏が行う。矢は全部で6回放たれる。1つ目は、青の御幣が下がっている東に放たれる。2つ目の矢は、赤の御幣が下がる「南」に放つ。3つ目の矢は、白い御幣の西の方位に放つ。4つ目の矢は、

写真9　愛宕の火祭りの結界
（2023年7月21日、筆者撮影）

写真10　本尊に向かい般若心経を唱える
（2023年7月21日、筆者撮影）

黒の御幣がある北の方角に放つ。5つ目の矢は、東西南北4人の明王を率いる不動明王の檜葉で覆われた護摩壇に放つ。最後に6つ目の矢は、丑寅の方位鬼門に放つ。

18時18分　法剣の儀は比良山の天狗次郎坊役のM氏によって行われる。護摩壇の前に立ち、空中に「光」の文字を切る。

18時20分　増田憲嶺氏が願文奉読（愛宕の火祭りをなぜ行うかの説明）を行う。

18時22分　檀家総代のM氏と檀家役員のM氏が護摩壇に点火する（写真11）。それと同時に増田大将（筆者）が太鼓を叩く。和太鼓を使用し四分の四拍子で般若心経リズムを取るために叩く。

18時50分　太鼓が止まり、柴燈護摩が終わる。合掌礼拝。

18時51分　昨年1年間、各家庭でお祀りしていたお札や、故人に手向けた供養塔婆などをお焚上げする。柴燈護摩が終わり次第、お焚き上げをしない人から帰路に就き、お焚上げをした人も終わり次第帰路につく。2019年までは柴燈護摩の終了後、素麺接待を行っていたが今年も行われなかった。その後、火を消す作業に入り祭りが終わる。

写真11　愛宕の火祭りの柴燈護摩
（2023年7月21日、筆者撮影）

第4節　お盆

8月6日の早朝6時から、智性院の住職の増田憲嶺氏と住職夫人が1～2時間かけて先代住職の墓地の清掃を行う。また、泉源寺の慣習として、檀家それぞれの墓掃除は8月7日に実施される。

8月13日になると、智性院と龍興院の檀家や地域住民が、智性院のお地蔵様や寺に設えた精霊棚（後述）に花を添える。智性院の檀家としては檀家総代のM氏、S氏、K氏、N氏が、龍興院の檀家としてはT氏、K氏、M氏、U氏が毎年参加する。一方、寺院では前日の8月12日に花を添える準備を行う。この日から、夜、先祖の墓に灯籠を設置する。

8月14日早朝5時からは、智性院の周辺にある先代住職の墓や境内のお地蔵様、塩谷家（住職夫人の旧姓）や庚申堂横のお地蔵様でお唱えが行われる。この行事は住職の増田憲嶺氏と住職夫人によって執り行われ、ロウソクと線香が供えられる。なお、山中にある先祖墓地には線香立てがないため、五寸釘で線香を立てている。この日の夜にも灯籠を灯す。

8月15日には智性院において施餓鬼が行われ、翌16日には増田憲嶺氏が舞鶴市松尾にある松尾寺で執り行われる施餓鬼に参加する。

8月17日には、お墓に供えられた花の片付けが行われ、作業は朝8時から11時頃まで続く。

智性院の施餓鬼は、愛宕の火祭りと同様に、2019年までは増田憲嶺氏と増田憲空氏、舞鶴市北吸にある大聖寺住職のM氏の3名で執り行われていた（写真12）。しかし、2020年以降は新型コロナウイルスの影響により、増田憲嶺氏のみで行われるようになった（写真13）。

なお各檀家でも、お盆の期間中、先祖を供養するために特別な祭壇である盆棚（精霊棚）を設える習わしがある。仏壇の前に台を置き、その上に真菰（まこも）または白布を敷く。四隅に青竹を立て、その竹の上部に紐を渡し、ホウズキ、昆布、素麺などを吊るす。この装飾は、仏の世界を荘厳する瓔珞（ようらく）を表している。

棚には普段仏壇に納めている先祖の位牌を移し、お寺から頂いた経木塔婆を立てる。その前には御霊供膳（箸には麻幹（おがら）の細いものを用いる）、お菓子、果実、季節の野菜、蓮の葉（芋の葉でも可）の上

写真 12　以前の施餓鬼の様子
（2008 年 8 月 15 日、住職夫人撮影）

写真 13　現在の施餓鬼の様子
（2024 年 8 月 15 日、住職夫人撮影）

に供えたミズノコ（茄子や胡瓜を賽の目に切り洗米と混ぜたもの）を飾る。また、精霊迎えの日には迎え団子を 6 つ、麻幹の脚をつけた胡瓜と茄子を供える。これらには以下のような意味が込められている。

ホウズキ：提灯に見立てる
昆　　布：喜びを表す
素　　麺：喜びを永く保つこと、麦の収穫祭を兼ねる
ミズノコ：百味の飲食としてすべての精霊・餓鬼への施し
団　　子：六地蔵への供え物
胡瓜と茄子：胡瓜は馬、茄子は牛を象徴し、精霊の乗り物とする。

各家では上述のような盆棚を作り、縁側には盆提灯を吊るして先祖の精霊を迎える準備をする。13 日にはお墓参りを行い、盆棚と同様の供え物を墓前に供える。墓参りから帰宅すると庭先や門口で麻幹を小さく折り、迎え火を焚く。この迎え火の火をロウソクなどに移し、盆提灯や盆棚の灯明に灯す。

お盆期間中には菩提寺の僧侶が家を訪れ、盆棚の前で先祖供養のための光明真言を唱える「棚経参り」が行われる。

2024年8月4日～8月17日の記録

8 月 4 日

13 時 00 分　増田憲嶺氏が、お盆でお墓参りの人が来るのに備えて墓地横の敷地の草刈りをする。
14 時 00 分　草刈りが終わる。

8 月 5 日

08 時 00 分　増田憲嶺氏が本堂にある仏器磨きを行う。
16 時 00 分　仏器磨きが終わる。

8 月 6 日

この日から棚経が始まる（写真 14）。
10 時 00 分　増田憲嶺氏が亀岡市の M 氏宅で棚経。

8 月 7 日

この日は上述のとおり泉源寺地区の墓掃除が行われる。檀家がご先祖の墓掃除に智性院の墓地に来る。この日は増田憲嶺氏が棚経で 5 軒を回る。
09 時 30 分　I 氏（舞鶴市森地区）
09 時 50 分　F 氏（舞鶴市竜宮町）
10 時 00 分　S 氏（舞鶴市愛宕上町）
10 時 15 分　N 氏（舞鶴市愛宕下町）
10 時 30 分　K 氏（舞鶴市朝来地区）
13 時 00 分　先代住職と増田憲嶺氏が増田家の墓を掃除する。
15 時 00 分　墓掃除が終わる。

8 月 8 日

この日も増田憲嶺氏が棚経で 5 軒を回る。
09 時 30 分　K 氏（舞鶴市溝尻地区）
09 時 40 分　K 氏（舞鶴市溝尻地区）
09 時 45 分　G 氏（舞鶴市溝尻地区）
10 時 00 分　K 氏（舞鶴市行永地区）
10 時 20 分　Y 氏（舞鶴市森地区）
13 時 00 分　増田憲嶺氏が永代供養の観音を掃除する。
15 時 00 分　墓掃除が終わる。

8 月 9 日

この日も増田憲嶺氏が棚経で 6 軒を回る。

09 時 00 分　N 氏（舞鶴市余部上地区）
09 時 15 分　S 氏（舞鶴市白浜台地区）
09 時 40 分　H 氏（舞鶴市下安久地区）
10 時 00 分　N 氏（舞鶴市七日市地区）
10 時 15 分　N 氏（舞鶴市倉谷地区）
10 時 30 分　I 氏（舞鶴市清美が丘地区）

8 月 10 日

この日も増田憲嶺氏が棚経で 6 軒を回る。

09 時 00 分　N 氏（舞鶴市泉源寺地区）
09 時 30 分　O 氏（舞鶴市溝尻地区）
09 時 45 分　O 氏（舞鶴市溝尻地区）
10 時 00 分　I 氏（舞鶴市溝尻地区）
10 時 20 分　F 氏（舞鶴市市場地区）
10 時 30 分　F 氏（舞鶴市愛宕中町）

8 月 11 日

この日も増田憲嶺氏が棚経で 5 軒を回る。

09 時 00 分　Y 氏（舞鶴市浜地区）
09 時 30 分　M 氏（舞鶴市京月町）
09 時 50 分　F 氏（舞鶴市森地区）
10 時 00 分　Y 氏（舞鶴市北吸地区）
10 時 30 分　K 氏（舞鶴市愛宕下町）
13 時 00 分　増田憲嶺氏が精霊棚の組み立てをする。精霊棚は、本堂の前、向かい側の屋外に設置されている。その構造は、加工された木の板や木の柱など、木材のみを使用して組み立てられており、四角い形状をしている。高さは約 160cm で、精霊を迎え供養するための場として設えられている。窓拭きと廊下掃除。
13 時 45 分　精霊棚の組み立てが終わる。精霊棚には、位牌と灯籠、香炉とご飯が供えられる。そして、5 本の竹と 5 色の旗を配置する。つぎに施餓鬼棚づくりを始める。施餓鬼棚には、先代住職の位牌とお供え物の御霊供膳やスイカやゼリー、団子が供えられる。御霊供膳は、帰ってきた祖霊への供養のために、お箸の向きが位牌の方に置かれる（写真 15）。
14 時 15 分　施餓鬼棚づくりと掃除が終わる。

8 月 12 日

この日も増田憲嶺氏が棚経で 7 軒を回る。

08 時 00 分　住職夫人が増田家や先代住職の墓に花を添える。
09 時 00 分　Y 氏（舞鶴市田中町）
09 時 15 分　K 氏（舞鶴市田中町）
09 時 30 分　T 氏（舞鶴市田中町）
09 時 45 分　K 氏（舞鶴市愛宕下町）
10 時 00 分　I 氏（舞鶴市愛宕下町）
10 時 15 分　E 氏（舞鶴市愛宕下町）
10 時 40 分　N 氏（舞鶴市森地区）

8 月 13 日

この日は、M さん、S さん、K さん、N さん、T さん、K さん、M さん、U さんがお地蔵さんや精霊棚の足元に花を添えにくる。増田憲嶺氏が棚経で 6 軒を回る。

09 時 00 分　Y 氏（舞鶴市泉源寺地区）

写真 14　棚経の様子
（2024 年 8 月 14 日、筆者撮影）

写真 15　智性院の施餓鬼棚
（2024 年 8 月 15 日、筆者撮影）

09 時 15 分　I 氏（舞鶴市泉源寺地区）
09 時 30 分　K 氏（舞鶴市溝尻地区）
09 時 50 分　O 氏（舞鶴市竜宮町）
10 時 00 分　M 氏（舞鶴市愛宕中町）
10 時 20 分　M 氏（舞鶴市田中町）
20 時 30 分　住職夫人が先代住職の墓に灯籠を置く。

8 月 14 日

この日は、増田憲嶺氏と龍興院住職の I 氏が棚経で各世帯を回る。すべての世帯を 2 名で訪ねる形をとっている。このように智性院と龍興院の住職が一緒に回るのは 14 日のみである。午前中に泉源寺地区、愛宕地区、田中町での棚経 62 軒、午後から 6 軒。

05 時 00 分　住職夫婦が先祖の墓、増田家、お地蔵さん、塩谷家、庚申堂の横のお地蔵さんにお唱えをする。増田憲嶺氏がお唱えをし、夫人が線香をあげる。
06 時 15 分　お唱えが終わる。
07 時 04 分　泉源寺地区の棚経を始める。
07 時 06 分　M 氏
07 時 10 分　M 氏
07 時 15 分　S 氏
07 時 17 分　N 氏
07 時 19 分　M 氏
07 時 21 分　S 氏
07 時 24 分　S 氏
07 時 26 分　M 氏
07 時 29 分　H 氏
07 時 33 分　N 氏
07 時 37 分　K 氏
07 時 38 分　M 氏
07 時 42 分　K 氏
07 時 48 分　K 氏
07 時 51 分　K 氏
07 時 54 分　K 氏
07 時 57 分　K 氏
08 時 06 分　M 氏
08 時 08 分　T 氏
08 時 11 分　K 氏
08 時 14 時　M 氏
08 時 18 分　U 氏
08 時 20 分　M 氏
08 時 22 分　M 氏
08 時 24 分　M 氏
08 時 27 分　K 氏
08 時 31 分　M 氏
08 時 33 分　M 氏
08 時 37 分　M 氏
08 時 39 分　S 氏
08 時 42 分　F 氏
08 時 47 分　F 氏
08 時 50 分　S 氏
08 時 51 分　I 氏
08 時 54 分　T 氏
08 時 58 分　Y 氏
09 時 00 分　M 氏
09 時 02 分　M 氏
09 時 09 分　M 氏
09 時 10 分　N 氏
09 時 19 分　H 氏
09 時 22 分　T 氏
09 時 27 分　T 氏
09 時 30 分　O 氏
09 時 37 分　M 氏
09 時 39 分　T 氏
09 時 44 分　M 氏
09 時 47 分　H 氏
09 時 52 分　M 氏
09 時 56 分　M 氏
09 時 57 分　M 氏
10 時 00 分　T 氏
10 時 03 分　T 氏
10 時 08 分　M 氏
10 時 11 分　S 氏
10 時 14 分　K 氏
10 時 16 分　I 氏
10 時 21 分　T 氏
10 時 25 分　M 氏
10 時 27 分　N 氏
10 時 30 分　U 氏
10 時 32 分　S 氏
10 時 33 分　午前中の棚経が終わる。
13 時 00 分　I 氏
13 時 21 分　N 氏
13 時 36 分　K 氏

13時52分　U氏
14時07分　M氏
14時30分　A氏
14時42分　午後の棚経が終わる。
20時30分　先代住職の墓の灯籠に明かりをつける。

8月15日

14時25分　智性院の施餓鬼法要が始まる。檀家のみが参加し、全員で11人であった。内訳は、30代の女性が1人、40代の男性が1人、50代の男性が1人、60代の女性が1人、70代以上の男性が5人、70代以上の女性が2人である。
14時26分　鐘を3回鳴らす。
14時27分　堂に入り、本尊の方を向き座る。
14時28分　般若心経を唱える。
14時32分　施餓鬼棚の方を向き座る。
14時33分　合掌礼拝。
14時34分　懺悔文（過ちを反省し心を清める文）を唱える。
14時35分　奠供。餓鬼や亡者に供養として食べ物と水を供え、供え物を清めるため真言を唱える。
14時45分　仏教の真理を説いた理趣経を三つの区切りに分け唱える。
14時55分　諷誦文（施餓鬼の説明とお経や祈りの言葉）。節をつけて唱える。
14時57分　後讃（仏や天界の存在に感謝を伝える意味の賛歌）を唱える。
15時05分　回向。儀式で得た功徳を、亡くなった人や餓鬼に分け与えるための祈りを捧げる。再び本尊に向かって正座し、礼拝する。
15時06分　施餓鬼が終わる。

8月16日

11時00分　松尾寺の施餓鬼。
12時00分　施餓鬼が終わる。

8月17日

08時00分　お墓に備えられた花の片付け。
11時00分　片付けが終わる。

第5節　彼岸

智性院では、毎年春に「彼岸会」を行う。一般に彼岸の時期は、春分・秋分の日を中日とし、その前後3日を加えた計7日間である。とくに春分や秋分は、太陽が真東から昇り真西に沈む時期であり、西方浄土を観じるにふさわしいとされる。この背景には、中国浄土教の教えが影響しているとも言われている。しかし、智性院では春彼岸のみ行事を実施しており、秋彼岸は農繁期のため行われていない。

春彼岸会は、彼岸の中日に近い日曜日の午後3時に本堂で執り行われる。行事は「春彼岸功徳廻向文」の奉読から始まり、故人の精霊の菩提を祈るとともに、参詣者自身が六波羅蜜の実践を通じて悟りの境地に至ることを願うものである。この文には、厳しい寒さが過ぎ去り春の訪れを感じる中、彼岸の夕映えを通して阿弥陀如来の極楽浄土を観じ、菩提を念ずる重要性が説かれている。また、かつては行事後に会食や当年度の会計報告が行われていたが、現在は高齢化の影響により行われていない。

春秋彼岸の中日には永代供養として「観音廟」と「永代個人墓」における法要も行われる。観音廟では約20名が参列し、午後1時半から読経と焼香が行われるが、永代供養墓では参列者が約3名と少人数である。また、智性院は松尾寺での塔婆供養にも関わっており、春秋の彼岸入りから中日にかけて出仕し、午前中に金剛院と智性院は本堂・位牌堂で読経を行う。中日夕刻には真言宗寺院のみが集まり、大師堂で総供養が行われる。

第6節　金比羅社の例祭

金毘羅大権現は、香川県琴平町の金刀比羅宮を本社とする神であり、主に「航海安全」「開運」「水難除け」のご利益があるとされている。泉源寺地区では、金刀比羅宮の分社として金毘羅社が建立され、地域の守護神として祀られてきた。

泉源寺地区における金毘羅社の起源は、天保6年（1835）に諦寛上人が当地に勧請（写真16）したことに始まる。その後、昭和5年（1930）に刀祢隆諦師によって社殿が造営された記録がある。さらに平成5年（1993）には増田憲空師により堂宇が再建され、現在の場所に移された。この再建

事業では、松尾寺・金剛院・大聖寺といった周辺寺院から助法を受け、開眼落慶法要や柴燈護摩が厳修された。また、この再建に関わった寄進者の名前が記されたのぼり旗が立てられた。

金毘羅社が建立された場所は、泉源寺地区北部に位置する愛宕山系の山頂であり、かつて天文23年（1554）に山城が存在した[9]とされる地である。この場所に金毘羅社が建てられたのは、愛宕山の火伏せ信仰に対して水難防止を祈願する意図があったと考えられている。

金毘羅社では、金刀比羅宮の例大祭にちなみ、毎年10月10日の午前10時に祭祀が行われている。この行事は、かつて寄進者である椋本理三郎氏が100万円を拠出して再建を主導した際、椋本氏や檀家役員数名が参列していた。しかし、椋本氏の逝去以降は檀家役員数名のみが参加する形となり、現在では檀家の高齢化や世代交代の影響を受けて、住職の増田憲嶺氏一人で行っている。

祭祀の準備としては、社の清掃、のぼり旗の設置、供花をし、祭祀当日には読経を捧げる。

写真16　金比羅社の起源
（2024年10月10日、増田憲嶺氏撮影）

第７節　小括

智性院では、大晦日・新春護摩、節分の星護摩、彼岸会、愛宕の火祭り、お盆の施餓鬼、金比羅社の例祭といった多彩な年中行事が行われており、これらは泉源寺地区の住民や檀家にとって仏教の教えを身近に感じる機会となっている。

新春護摩では、大晦日から元日にかけて護摩を焚き、新年の家内安全や無病息災を祈願するため、多くの参拝者が智性院を訪れる。節分の星護摩は、その年の九星に基づいて個々の運勢を祈念する行事で、護摩の炎によって災厄を焼き払い福を招くことが祈られる。参拝者は自身の星回りに応じた護摩木を供えて、一年の平穏無事を願う。春の彼岸会は先祖供養を目的とする仏教行事であり、参拝者は供物を捧げて先祖への感謝と冥福を祈る。この行事では、仏の教えに触れることで心の安寧を得ることができるとされる。愛宕の火祭りでは、火伏せの神として信仰される愛宕神を祀り、護摩供養を通じて無病息災や家内安全を祈願し、火災からの守護を願う。お盆の施餓鬼法要は、先祖供養とともに、餓鬼道に苦しむ存在への供養を目的として行われる。この法要では僧侶による読経が行われ、参拝者は先祖への感謝と自らの心の浄化を祈念する。

これらの行事は、増田憲嶺氏が中心となり、高野山での修行や経験を基に執り行っている。

第４章　考察

行事全般の変化

智性院における年中行事は、少子高齢化や過疎化、新型コロナウイルスなどの社会的変化によって、形式や内容が大きく変化している。その背景には、地域人口の減少、住民の生活様式の変化、そして社会全体における宗教行事の位置づけの変容がある。これらの要因が複雑に絡み合い、従来の形式で行われていた行事が縮小し、場合によっては中止や簡略化を余儀なくされている状況がある。とくに少子高齢化と過疎化は、年中行事に大きな影響を与えている。かつては檀家や泉源寺地区住民は家族で参加することが多かったが、泉源地区住民が減少し、参加者数の減少と共に行事運営の担い手も不足する状況となっている。

例えば、第３章で述べたように、愛宕の火祭りでは太鼓を叩いて祭りを盛り上げてくれた子どもたちや、素麺接待の際に調理を手伝ってくれた女性たち、節分の豆まきを楽しみながら行ってくれた子どもたち、そして会食の準備に尽力してくれた大人たちの姿があり、地域全体で行事を支える風景が広がっていた。しかし現在では、こうした役割を担う人々が減少し、それに伴って行事が短

縮せざるをえない形に至っている。このような変化は、地域の文化や伝統の継承に深刻な影響を及ぼしているといえる。このような変更は、行事の参加ハードルを下げる一方で、伝統的な儀式や行事の本来の意味を薄れさせる懸念もある。

また、新型コロナウイルスの流行は、行事全般のあり方を大きく見直す契機となった。これまでの少子高齢化や過疎化に加え、コロナ禍の影響により、従来は他寺から僧侶を招いて行っていた行事も、感染防止の観点から外部の僧侶を呼ぶことを控えるようになった。その結果、行事の華やかさや盛り上がりが損なわれ、地域住民や檀家の参加意欲にも影響を与えている。さらに、コロナ禍が収束した後も、お寺側は参加者の減少を理由に他寺から僧侶を招くことを取りやめる傾向が続いている。そのため、行事が「とりあえず実施すればよい」という形式的なものに留まるようになり、地域住民にとっての魅力や意義が薄れつつある。このような状況が続けば、行事への参加者が減少する悪循環が生まれかねない。

こうした現状に対し、智性院の増田憲嶺氏は、人手不足や準備の大変さがあるものの、かつて地域住民が楽しみにしていた素麺接待や会食といった交流の場を徐々に復活させる意向を示している。これにより、単なる儀式としての行事ではなく、地域住民が共に集い、親睦を深める機会を再構築し、行事の持つ本来の役割を取り戻すことを期待したい。

このように、智性院の年中行事は少子高齢化や過疎化、新型コロナウイルスといった社会的変化の影響を受けながらも、行事が持つ役割や地区住民に与える影響を見直し、柔軟に対応していく姿勢が重要である。現代において、地域社会や寺院を取り巻く環境はかつてない速さで変化している。こうした中で、智性院が目指すべき方向性は、年中行事という伝統を守りながらも新しい価値を創造することであろう。年中行事を単なる形式的な儀式としてではなく、地域住民が再び一体感を感じられる場として位置づける必要がある。そのためには、変化を受け入れつつも行事の本質を失わず、努力することこそが智性院の年間行事が継続していくことに繋がると考える。

地域社会との関わりの変化

智性院における地域社会との関わりは、長い歴史の中で大きな変化を遂げてきた。かつては檀家も含めた泉源寺地区住民が中心となって寺院の行事を支えていた可能性も考えられるが、すでに増田憲空氏の時代には信仰心が希薄化していたことが確認されている。その具体的な例として、憲空氏が住職を務め、憲嶺氏が見習いとして寺院を手伝っていた頃のできごとが挙げられる。この時期、檀家から「愛宕の火祭り行事における作法のひとつが長すぎるから省略してはどうか」という提案が寄せられたり、行事後の会食に対しても「わざわざ行わなくてもいいのでは」といった意見が出されたりしていた。これらの発言は、檀家自身が寺院の伝統や行事に対して積極的な関心を抱かなくなりつつあったことを示している。このように、地域住民の信仰心や寺院との関わり方は、憲空氏の時代からすでに変化の兆しを見せていた。

加えて、近代以降の核家族化や過疎化の進行により、寺院や宗教とのつながりはさらに弱まり、多くの住民が墓参りや年中行事からも足を遠ざけているのが現状である。とくに核家族化による家族構造の変化は、寺院と住民との関係性に大きな影響を与えている。その具体例として、核家族化によって墓地の管理や墓参りが代々受け継がれなくなっている現状が挙げられる。祖父母と同居していれば、子供や孫が一緒に墓参りに行く機会が自然と生まれ、その習慣が代々受け継がれる可能性が高い。しかし、核家族化が進むことで、こうした行事に関わる機会が減少し、孫の世代には墓参りの習慣やその意義そのものが伝わらなくなっている。実際に、智性院でも墓参りをする家族の数が年々減少しており、放置された墓がいくつか見られる状況になっている。このような事態は、核家族化による家族構造の変化が寺院との関係性を希薄化させていることを如実に示している。そして現代では「お寺に行く」という行為そのものが生活の中で優先されなくなり、智性院のような地方寺院であっても住民との接点を確保することが難しくなっている。

また、僧侶のあり方もこうした状況に影響を与えていると考えられる。増田憲嶺氏によれば、現代の僧侶は、例えば葬儀や法事などの場において、

地域住民と深く交流する機会が少なくなっているという。とくに、葬儀や法事が終わった後に僧侶がその家の人と話す時間を設けず、「次の予定がありますので失礼します」と早々に立ち去るような場合、家の人々にとっては素っ気ないと感じられることもある。憲嶺氏は、僧侶がただ儀式を執り行うだけでなく、故人の思い出や家族の近況、家の様子について話を聞くことも僧侶の重要な役割であると指摘している。このような会話の中で住民に寄り添う姿勢を示すことで、住民との信頼関係が築かれる。一方で、寺側が寄り添う努力を怠れば、住民も寺院に対して心を開かなくなり、良好な関係性を築くことは難しくなるだろう。一人ひとりとじっくり話すことは物理的に困難かもしれないが、僧侶として住民と対話する機会を意識的に作ることが必要であると憲嶺氏は語る。このような背景から、智性院の年中行事もかつてのように住民が自然と協力し合うものではなくなり、寺院側が一方的に行事を提供する形へと変化している。

さらに、高齢化の影響も非常に大きい。信仰心が強く、寺院と深い関わりを持っていた戦争を経験した世代の檀家や住民が高齢化に伴い参加できなくなったことで、行事そのものが縮小傾向にある。かつては年中行事の後に行われていた会食や檀家旅行といった対話の場も次第に減少し、行事が地区住民同士の絆を深める機会として機能しにくくなっている。さらに、長時間にわたる伝統的な行事は、参加者にとって体力的な負担が大きく、短縮化せざるを得ない状況も発生している。その具体的な事例として、大晦日の新春護摩や節分の護摩が挙げられる。

第３章でも述べたように、これらの行事は時期的に寒さが厳しい上に、寺院自体が山の上に位置していることもあり、高齢者にとって参加するだけでも大きな負担となっている。このため、実際には２時間かかる内容の儀式も、１時間以内で済むようにと増田憲嶺氏が自ら作法を短縮し、工夫を凝らして行を執り行っている。このような対応は、高齢化が進む中で参加者の体力的負担を軽減し、行事を継続させるためのやむを得ない措置といえる。さらに、少子化の影響で地区全体の人口が減少し、寺院の行事に参加する住民の数も減少傾向にある。住民一人ひとりの生活が忙しくなり、仕事や学校、家事といった日常生活に追われる中で、宗教行事は「参加しなくても問題のないもの」と認識されがちである。こうした状況から、年中行事や寺院の役割が生活の中で占める割合は、今後ますます縮小していくと考えられる。

現代社会において、年中行事や宗教的活動への関心は確実に薄れつつある。とくに、核家族化や過疎化、高齢化といった社会的要因は、寺院と地域住民の結びつきを希薄化させる大きな要因となっている。信仰心の強かった世代が高齢化し参加できなくなる一方で、若い世代は宗教行事への関心を持つ機会そのものが少なくなり、結果として年中行事そのものの存続が危機的状況を迎えているのである。

おわりに

智性院が今後直面する課題は多くある。その中でも、少子高齢化による人員不足や財政的な問題は大きな点である。地域住民の参加率が低下する中で、行事の運営や日常の維持管理を担う人材が不足し、寺院が持続可能な形で運営を続けていくことが難しくなりつつある。

これに対する解決策として、筆者としては、智性院は次のような取り組みをすればよいと考える。まずは、地域住民や若年層が寺院活動への関与を促進するために、泉源寺地区全体を巻き込む仕組みが必要である。例えば、愛宕の火祭りの最後に行われる素麺接待を子どもたちが参加したいと思えるようなものに変えることで、若年層の参加が促進されることが考えられる。

次に、オンライン配信やSNSを活用した情報発信により、寺院の活動をより広範囲に伝えることができる。とくに、遠方にいる元地域住民や都市部に移住した住民との新しい関わり方を模索することは、寺院の持続可能性を高めることが出来ると考える。

また、財政面では、地域文化や歴史的価値を活用した観光資源化やクラウドファンディングを通じて、寺院の活動を支える新しい資金調達も有効であると考える。

最終的に、智性院がこうした課題に対処するた

めには、寺院だけが努力するのではなく、地域社会全体と協力しながら新たな価値を創造していくことが不可欠である。

[1] 伊藤唯真「四季の仏教行事と民俗信仰〈総説〉」、伊藤唯真編『仏教民俗学大系6　仏教年中行事』名著出版、1986年、29～44頁。
[2] 伊藤唯真、「寺院行事のなかの民俗〈総説〉」、伊藤唯真編『仏教民俗学大系6　仏教年中行事』名著出版、1986年、289～301頁。
[3] 戸川安章「寺と地域社会」、戸川安章編『仏教民俗学大系7　寺と地域社会』名著出版、2016年、1～17頁。
[4] 田中宣一「寺院と農耕儀礼」、戸川安章編『仏教民俗学大系7　寺と地域社会』名著出版、2016年、299～318頁。
[5] 以下に記す内容は筆者が2024年7月6日・同年12月30日・2025年1月20日に増田憲嶺氏に対して実施した聞き取りによる。
[6] 以下の聞き取り内容の記述については、煩雑を避けるため、話者名と聞き取り日を個別に示すことはしていない。
[7] 護摩は、本尊の仏様を迎える回数によって呼び方が異なる。一度だけなら一段護摩、二度なら二段護摩、三度なら三段護摩、と呼ばれ、もっとも数が多いときは九段護摩にのぼることもある。一度に招く仏様の数は1人の場合もあれば、複数の場合もある。招く仏様の数が多ければ、その分護摩祈祷の時間も長くなる。一般的には三、五、六段護摩を行われることが多い。智性院で行なうのは三段護摩である。
[8] 2024年2月3日増田憲嶺氏
[9] 舞鶴山城研究会編『舞鶴の山城―戦国時代を訪ねる』舞鶴山城研究会、2009年。